

# 底力みせる“牛・豚・鶏”。 環境対策の“救世主”も稼働。

“畜産王国”川南の歴史は古い。藩政時代から続く。そんな伝統が川南の畜産技術を高めてきたのだろう。高品質、安定供給には定評があり、ヨコの連帯感も強い。

「近年、全国的に牛を取り巻く環境には非常に厳しいものが

ありましたが、川南はかえって結束力が高まり、逆にチャンスとばかり奮起しました。みんなプライドを持って取り組んでいきます（川南町農林水産課）



肉用牛、乳用牛、豚、採卵鶏、ブロイラーなどによる專業または複合経営で成り立っており、とくに養豚の場合、四千頭を超す大規模経営も十軒ほどある。この畜産全体で、町の農業粗生産額の六割を超す。全国

にも知られる一大産地なのだ。家畜数（平成十三年二月現在では、採卵鶏が百三十万羽を超えて県内トップを走る。豚も約十三万三千頭で、一位の都城市に次ぐ勢い。以下、乳用牛約千七百頭（三位）、ブロイラー約百万羽（五位）、肉用牛約九千頭（十位）となっている。

しかし、牛肉や乳製品の自由化、生乳の生産調整など、厳しい環境はまだまだ続く。安心・安全や高品質を追求しつつ、先の認定農家制度を活用するなど、経営の安定化、効率化を図り、ますます強い体質づくりを行っていく必要がある。

ところで、畜産の生産地であるがゆえに、長年、別の悩みも生み出し続けてきた。家畜の糞尿問題。いわゆる「家畜排せつ物法」の施行で、平成十六年以降は、野積みや素掘りが一切できなくなる。町では一年間かけて畜ふん処理の実験を進め、平成十四年十二月に誘致企業による「堆肥化センター」を稼働させた。

「下水道汚泥を好むY/M菌」という種菌を使って処理します。十の匂いが一か二になる、画期的なもの（農林水産課畜産環境対策室）。一日二百トン、年間七万三千トンの畜ふんを処理する。これは、川南町から出る畜ふんの四分の一に相当。では、処理できない残りはどうするのか。実は工場で処理した後は良質な「完熟有機肥料」ができ、これを農家が各自の堆肥舎で畜ふんの水分調整剤として



利用し発酵させると、また、Y/M菌が働き、匂いはほぼ消滅するという仕掛け。畜舎にそのまま撒いても効果的だ。もちろん畑の肥料としても積極的に活用していきたい。こうした耕種農家と畜産農家が一体となった循環型農業も、求められるこれからの農業のひとつの姿だろう。

